旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

――若松　秀俊

◇1◇

忘れられた異人さん

多彩な人材を育てる

大正末期から昭和初期にかけ旧制松江高等学校でドイツ語講師として教鞭を執る一方、こよなく日本を愛したドイツ人哲学者フリッツ・カルシュ。多くの人材を育成し、人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介するなど、ラフカディオ・ハーンに劣らぬ足跡を日本にしるしたが、その功績はほとんど知られていない。その歴史に埋もれた業績と足跡を、精力的にカルシュを追い続けている若松秀俊・東京医科歯科大学大学院教授に跡付けてもらう。

「袖すり合うも他生の縁」というが、縁もゆかりもなかったカルシュと筆者を結び付けたのは、全くの偶然であった。

筆者は三十年ほど前にドイツ学術交流会（DAAD）の奨学生として、ドイツの大学で研究生活を送った。そのおかげで、ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会を与えられた。そして、ここでの物語のそもそものはじまりは三年半ほど前に、筆者がシュトゥットガルトでカルシュの娘さんに出会ったことにあった。それに到る経過は、単なる偶然と思えない出来事の連続によるものであった。

カルシュは残念ながら、日本では人に知られぬ哲学者である。わずかな手掛かりから彼の足跡を追う中で、次第に彼の偉大さを知ることになった。何とかして、知られざる彼の功績を公平な眼で見てあげたい。そんな思いから筆を執ることにしたわけである。

フリッツ・カルシュ博士

戦前、旧制松江高等学校（現島根大学）のドイツ語の講師として、十四年間にわたり教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者フリッツ・カルシュ博士が生まれて今年で百十年になる。今や、ほとんど忘れられている彼は、人の認識の発展過程を考究する人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介した人物でもある。日本を第二の故郷として愛したカルシュを顕彰することは、日本だけではなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。

彼は一八九三（明治二十六）年、ドイツ東部のブラゼヴィッツで父ヘルマン、母ルイーゼの間に生まれ、一九七一（昭和四十六）年にカッセルで没した。一九二五（大正十四）年にブラーゲの後任として松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、後には外交官として終戦まで働いた。松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの著作の影響による。

カルシュの薫陶を受けた生徒の中には「長崎の鐘」で知られる永井隆博士をはじめ、高齢ではあるが健在の著名人を多数見い出すことができる。直接に指導と影響を受けた人の中には、国務大臣など要職にあった政界人、著名な文学・医学・化学界の学者、法曹界の重鎮、大使級の外交官などが見られる。さらに数知れない実業界の指導者、スポーツ界の功労者も挙げられる。また当時指導を受けた台湾と朝鮮からの生徒は、ほとんど例外なく戦後に故国で要職についてその発展に貢献した。

具体的な人名を挙げると、政界では衆議院議員で自治相を務めた赤澤正道（昭和二年卒業の四期文乙）元島根県知事伊達慎一郎（五期文乙）元衆議院議員の楢橋渡（六期文乙）衆議院議員、国務大臣を歴任した細田吉蔵（九期文甲）や元衆議院議員・労働大臣の山手満男（十一期文乙）がいる。

芸術界・出版界では、元カリフォルニア州立ラントン大教授として、また舞踏家としてドイツ留学後の欧米の舞台で活躍した邦正美（八期文甲）岸田国士の劇作同人で大映映画「羅生門」のプロデューサー・放送作家を務めた異能の士である辻久一（九期文乙）「暮しの手帖」社を設立し編集長を務めた花森安治（十期文乙）など枚挙にいとまがない。

外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚（九期理甲）海外移住事業団理事、ウルグアイ大使歴任の大城斉敏（十期文甲）。

法曹界では大阪弁護士会会長、日弁連会長を務めた和島岩吉（五期文乙）元広島高裁長官の松本冬樹（八期文甲）同じく元広島高裁長官矢崎憲正（十期文乙）元福岡高裁長官綿引紳郎（十五期文乙）。

学界では前述の元長崎医科大放射線医学教授永井隆（五期理乙）元島根大・元琉球大教授の酒井勝郎（五期理乙）元滋賀大学国文学教授で雑俳史研究家の宮田正信（九期文乙）元北海道大印度哲学教授、僧侶で鈴木大拙の後継者の古田紹欽（十期文乙）元大阪大教授微生物病研究所長で紫綬褒章を受章したマラリア研究の奥野良臣（十四期理乙）らがいる。

わかまつ・ひでとし　1946年福島県生まれ。横浜国立大大学院修士課程修了。足利工大助教授、福井大学教授を経て平成4年から東京医科歯科大医学部教授。現在は同大学・大学院教授。専門は生体機能支援システム工学。工学博士。